

母語を発見する眼

——日本語研究講座におけるディベートの試み——

細 川 英 雄

1. はじめに
2. ディベートの目的と方法
3. ディベートの内容
 - 3-1 弁論 1
 - 3-2 弁論 2
4. 母語を発見する眼——この授業のめざすもの——
5. おわりに

1. はじめに

早稲田大学日本語研究教育センターに設置された日本語研究講座は、日本語に関心を持つ全学部の日本人学生を対象とした、いわば課外の自主講座である。

この日本語講座を受講する学生は、一部の例外を除いて、日本語研究者をめざしているわけでもなく、また、強い日本語教師志望を持っているのでもない。むしろ、広くことばに関心を持つ学部学生の層である。この層が早稲田ではかなり広くかつ厚いことを最近実感しているが、それはともかくとして、この講座は、卒業単位取得のための講座ではないので、その参加はきわめて自由であり、その自由さゆえに、こうした受講者を対象に、どれだけのことが要求できるのか、また、彼らはどのようなことを必要としているのか、という点でわからないことが多く、この職場に籍を置くようになって3年、このことは常に私の頭を離れない。

ここでは、こうした私自身の葛藤を模索しつつ、この講座の中で試みた

ディベートの詳細について報告し、〈母語の発見〉という視点の意味について考えてみたい。

2. ディベートの目的と方法

「日本語再発見」ということが話題になるようになって久しい。おそらくは、池田摩耶子『日本語再発見』〈三省堂〉あたりがきっかけとなって一般に普及したものと思われるが、母語である日本語についてもう一度知ろうとする行為は、まさにこの「日本語再発見」の試みであるといえる。実際、この講座の受講動機として、このことを挙げる受講者も毎年数人見られるほどである。

一方、日本語を母語とする者が日本語について知ろうとする行為は、母語を相対化し、客観視できる能力を有するようになることだと言われてもいる(田中望他『日本語教授法』〈大修館〉参照)。しかし、多くの講座や授業において、日本語を知るとは、日本語に関する知識を身につけることだと認識している受講者も少なくなく、カリキュラム自体がそうした認識の上に組み立てられている場合もしばしばみられる。

つまり、この「日本語再発見」の発想は、外国人のための日本語教育との関わりをきっかけにして、いままで気がつかなかった日本語の諸現象や諸問題に目が行くようになるということなのだろうが、それはそうなのかなことではない。したがって、単に外国人のための日本語教育に携わることや、そのための知識を得ることがすなわち母語の発見につながると思いこむのは、むしろきわめて危険な発想なのではなからうか。とくに近年の日本語教育ブームの中で、このことは過大に喧伝されている趣があるように思われる。

こうした状況の中で、まず必要なことは、日本語に関する知識を切り与えたり、日本語教授法を簡便に解説したりするのではなく、もう一度、「日本語を知るとは何か」という問いを受講者自身に問い直させることだと私は考える。

そのためには、担当者の考えや意見はできるだけ控え、受講者の中から出された諸問題について、受講者自身がさまざまに議論し、その過程で、自らのテーマを発見していくという講座形態がのぞましいと思われる。

1993年度に筆者が担当した講座は、「日本語学 1—文法・意味・談話」であるが、この受講者に対し、最初に提出した問いは、「この講座で私たちは何を知ろうとするのか」ということであった。日本語研究に限らないが、その講座で何を知ろうとするのかということを受講者が明確に自覚しているかどうかは、そのあとの学習に多大な影響を与えるからである。このディベートは、その手始めとして行ったものであるといえる。

今回のディベートのテーマは、「文法とは何か」ということにし、資料として、「文法に囚はれないこと」(谷崎潤一郎『文章読本』中央公論社昭和9年)を取り上げ、この文章の趣旨に賛成か反対かというそれぞれの立場を決め、そこから、両派に分かれて討論を行った。

ディベートでは、次のようなタイム・テーブルを組み立てた(伊中悦子・高崎みどり編『学生のための言語表現法』双文社出版 参照)。

◆タイムテーブル(1993年5月11日〈火〉5時限)

- 4:20~4:30 準備
- 4:30~4:45 賛成派弁論1
- 4:45~5:00 反対派弁論1
- 5:00~5:10 作戦タイム
- 5:10~5:25 賛成派弁論2
- 5:25~5:40 反対派弁論2
- 5:40~5:50 講評

なお、資料として挙げた谷崎の文章は次の通りである。

全体、日本語には、西洋語にあるやうなむづかしい文法と云ふものはありません。テニヲハの使ひ方とか、数の数へ方とか、動詞助動詞の活用とか、仮名遣ひとか、いろいろ日本語に特有な規則はありますけれども、専門の国学者ででもない限り、文法的に誤りのない文章を

書いてゐる人は、一人もないであります。又、間違へても実際には差支へなく通用してゐる。私がしばしば奇異に感ずるのは、電車に乗ると、車掌がやつて来て「誰か切符の切つてない方はありませんか」と云つて廻ります。此の車掌の言葉などは、文法的に解剖すると、余程をかしい。しかし実際にはこれ通用してゐるので、もし此の言葉を文法的に間違ひなく云はうとすると、どんな風に云つたらよいか、余程長たらしい、聞き取りにくいものになるであります。かう云ふ例は幾らもあるのであります、われわれの国の言葉にもテンスの規則などがないことはありませんけれども、誰も正確には使つてゐませんし、一々そんなことを気にしてゐては用が足りません。「した」と云へば過去、「する」と云へば現在、「しよう」と云へば未来であります、その時の都合でいろいろになる。一つの連続した動作を叙するにも、「した」「する」「しよう」を同時に使つたり前後して使つたり、全く規則がないのにも等しい。だがそれでゐて実際には何の不便もなく、現在のことか過去のことかはその場その場で自から半別がつく。又日本語のセンテンスは必ずしも主格のあることを必要としない。「お暑うございます。」「お寒うございます。」「御機嫌は如何でいらつしゃいます。」などと云ふ時に、一々「今日のお天気は」とか「あなたは」とか断る者は誰もゐない。「暑い。」「寒い。」「淋しかったです。」でも、立派に一つのセンテンスになり得る。つまり日本語には英文法に於けるセンテンスの構成と云ふやうなものが存在しない。どんな句でも、たつた一つの単語でも、随時随所に独立したセンテンスになり得るのでありますから、われわれは特にセンテンスなどと云ふものを考へる迄もない。で、かう申しては少し極端かも知れませんが、日本語の文法と云ふものは、動詞助動詞の活用とか、仮名遣ひとか、係り結びとかの規則を除いたら、その大部分が西洋の模倣であります、習つても実際には役に立たないものか、習はずとも自然に覚えられるものか、孰方かであります。

3. ディベートの内容

3-1 弁論 1

(賛成派 1—政経学部・本間)

谷崎潤一郎の目指しているものという観点から賛成派の意見を述べたいと思います。谷崎潤一郎がこの一連の文章の中で目指していることは、美しい文章、良い文章というのはどういうものかというのを論じている訳ですが、この「文法に囚われないこと」という文章の中では、文法に執着することでは名文にはつながらないというふうに言っています。まず口語においての例があがっているわけですが、文法的に正しい言葉では長く聞き取りにくいものになると述べています。ですから、まず口語においては、文法的に正しい言葉よりも、意味が迅速に伝わることの方に重点をおいているわけです。そして、何でも読まれることを前提としている文章の方ですが、何度も読まれる、誰にでも読まれることを前提としているので、それに耐えられるだけのより所というふうには言っています。この場合、文法が重要かという文法、よりは文体を考えて吟味する方が重要と読み取れます。例えば、過去の事柄を表すからといって「た」「た」と連続すれば読みやすいかどうか。それは結局読みぐるしいわけです。文法に執着するならば、それよりも簡潔さ、文の調子といった方に時間を割くほうがより、読みやすい伝達的手段として効率のよい文章ができあがるというふうに考えられます。めざすところは、文法的にもたやすく、意味も通じやすいという文章なのでしょうが、それが一番望ましいという点に異論はないのですが、文法的にただしくても結果的に不明瞭という文章もあります。またその反対に、文法的に誤りでも明瞭という文章も数多くみかけると思います。それは例えば、講演などをそのまま文章にしたものに言えると思いますけれども、それは文法的に誤りの箇所が何カ所あっても、活字を読むということを考えた場合、そちらの方がより明瞭に、読みやすい、頭に入りやすいといった点が多く見られると思います。以上のことから、名文をめざすためには、文法よりも、むしろ相手を考えた文体の修行の方を重

んじるとというのが、谷崎の論旨であると思い、それに賛成する意見を述べてみました。

(賛成派 2—商学部・渡辺)

私は日本人が日本語の文法に対して抱いている気持ちということで、この谷崎潤一郎のいっている「日本語には西洋語にあるような難しい文法というものはありません」という主張はまちがいでないと思っております。この谷崎潤一郎の文章読本は昭和9年に書かれたものなんですけれども、今ではだいぶ状況が違ってきまして、例えば外国人が日本語を学ぶとか、自分達日本人が外国語を学ぶという状況ができています。日本人が英語をやるときにはやはり文法から入っていくのと逆に、外国人が日本語を学ぶときに最初にやることはやはり文法であり、外国語の先生が外国語を学ぼうとする人に対して、「この言葉には文法がない」ということを言ったらすごく面食らっちゃうと思うんですけれども、では外国語学習者が一生懸命覚えた文法を思い出しながらたどたどしくしゃべるような状況、それが外国語をしゃべれたということになるのかという非常に疑問でしょう。本当にその言葉を話せるというのは、まず文法事項が頭の中に入っていて、それが本当に自由自在につかえるという状態——これは昔読んだか聞いたかしたことですが、その言葉で口げんかができるようになれば一人前だと。口げんかするときには文法を考えると人はいないと思いますので、最初は確かに文法は重要ですが、例えば、その言葉を話せる——日本語ならば一般的な日本人——にとって、文法というのはそれほど気にする必要などないのではないか。その点では谷崎の文法観は現在でも通用するものではないかと思います。「は」「が」などの「規範文法を考えない」というつもりで、べつに「ハナモグラ語でもいい」という意味ではなかったのですが...

(賛成派 3—第二文学部・斎藤)

日本語の文法というのは——というより、西洋の模倣としての文法というのは、主語があって、述語があるという形があるということが前提にな

って成り立っていると思うんですね。文法が役に立つというのは、その言葉を見つけた時に、何か解釈に役立つような文法でなければならないと思うんです。わたしは日本語に主語はないという考えをもっていて、「彼女に逃げられた」という文章があるとします。この主語は何かと考えたときに、明確に答えられる人はいないと思います。「逃げた」のは彼女であって、その意味から考えると「彼女」はやはり主語なのではないかと思うんですね。しかし、受け身形であって、その状況を受け止めているのは、やはり言葉を発した人だと思います。仮にこの文章を英語に直そうと思うと、「私」が主語になると思うんですけども、実は「逃げる」という語は自動詞であって受動態にはならないんです。そういう意味で、日本語における主語というのではないのではないかと思います。そういう意味で、西洋の模倣としての文法というのは不完全なのではないかと思います。

(賛成派 4—教育学部・長沼)

谷崎の文の最後のところの、「習っても実際には役にたたないものか、習わなくても自然に覚えられるものだ」というところに賛成です。谷崎がここで日本語の文法と言っているのが何を言っているのかはよくわからないのですが、私は中学で習う国文法について英文法と比較して考えをまとめてみました。中学で習う文法は、これは覚えたからといって、日本語がよりよく話せるというものではなくて、文節に切るとか品詞に分けるとか、何か文章を機械的に分けている感じがしました。私の頭の中にある日本語の文法というものは、文章があってその後からくっつけたという感じのするもので、英文法との違いは、英語は文法があって初めて文が成立するところが根本的に違うと思います。具体例として、日本語でも現在と過去の区別はあるけれども、英語のように現在完了は have+過去分詞だとか、未来形には助動詞 will を使うなどの文法を覚えなくても実際には通じるとか、ドイツ語とかフランス語では人称により動詞が変化するので、まず文法を覚えなくては会話は成立しないけれども、その点、

日本語文法は、最後に書いてあるように、習わなくても会話は成立するところ、谷崎の意見に賛成します。

(賛成派 5—教育学部・吉岡)

僕はここで谷崎が文法にあまりこだわらなくていいというのは、文法がどうしても一つの規範として存在するからだと思うんです。明治時代に日本語の文法というのは体系化がだんだんされてきた段階で、東京のある一定の場所の言葉を使って、それを文法の分析の対象としたわけで、その当時、すなわち、谷崎がこの文章を書いたときに使用されている俗語というのは谷崎の言う文法には含まれていないわけです。そういった意味でも文法は一つの規範として存在せざるを得ないという面があると思います。ですから、実際に文章を書く際には、文法にそれほどこだわらなくても書けるわけで、谷崎の言っていることは正しいと考えられます。



(反対派 1—教育学部・内田)

まず、「全体、日本語には西洋語にあるような難しい文法というようなものはありません」という一文。わたしは今日日本語教育の方を勉強しているものですから、この一点について考えてみたいと思います。文章を書くときに文法は必要ないとか、確かにそういうことも考えたことはあるんですけども、わたしは特に日本語教育に携わっているという特殊な立場にあるので、この一文を読んで、反対の立場をとりました。一年間、日本文法を日本人なのに勉強して、いかに日本語の文法というのが——私達はネイティブですから考えないで使っていますけれども、日本語の文法というのは実はものすごく難しいんだということに気がつきました。たとえば、「わたしは内田です」というのも「わたしが内田です」というのは、よくとりあげられる例ですけども、これはかなり意味が違って使われると思います。例えばわたしが自己紹介するときに「わたしは内田です」というのは普通ですけども、例えば先生に「内田さんはどなたですか」と聞かれたときに、「わたしは内田です」とわたしは言わないと思いますし、み

なさんとも言わないと思います。「わたしが内田です」と言うと思います。これはやはり「は」と「が」の文法的な規範があるわけですし、ほかにも「特に」と「特別に」は両方とも副詞で、英語でいうと especially ですけれども、日本語の「特に」は英語の especially の意味ですけれども、「特別に」には例外的というような意味も含まれるわけです。それはわたしたちは意識しては使っていないですが、やはりこの違いを区別できるということは、そこに規範があるわけですから、「むずかしい文法というものはありません」というところに関して反論すれば、日本語にも難しい文法があると思います。

(反対派 2—教育学研究科・坂口)

私も谷崎の意見には反対なんですけれども、まず「全体、日本語には西洋語にあるような難しい文法というものはありません」というところで、文法のない言葉なんていうものは私は存在しないと思っているので、この部分でまずひっかかりました。それで、谷崎の論を見ていくと、間違っても通用するから、その場の状況で判断できるから文法なんていうものは要らないという——極論かもしれませんが、そういうふうな言い方をしているんですけれども、通用しているということは、個人の段階の文法もあるんですけれども、みんなの中に共通の部分があるから通用しているということで、共通している部分というのが文法になってくるんじゃないかと思います。ですから、谷崎の論には反対です。それから、文法という言葉の使い方がこの文章の中であいまいになっていると私は思いました。日本語に特有の規則とか、文法的に間違いなく言おうとかそういう言葉を使っているんですが、すべてが同じものを指しているとは私には思えなくて、あとの方の最後の部分でも、そちらの方でも何かを混同して使っているという部分が、谷崎の文には見られますので、素直にはこの文章には賛成できません。以上です。

(反対派 3—教育学部・山本)

谷崎の文に「西洋にあるような難しい文法はありません」とあります

が、西洋人にとっても自分達の母語が難しいものだ意識したことはないはずだから、これは偏見だと思います。ところで耳から言葉を覚えるとすぐ覚えますが、大人になって文法、単語、発音という風に覚えますと、大変外国語というのは難しいと言います。文法学習など不要だというわけです。だからといって、耳から覚える言葉に文法が内在していない訳ではなく、例えば文法に全く反した言い方になると、口げんかをした時でもやはり通じない。タモリのハナモグラ語を言ったとしても通じないのが、その良い例です。日本人で外国語を勉強した人の会話は、文法がきちっとして、厳しすぎておもしろくないと言われます。文法をきちっと守ると美文ではないというような意見が先程ありましたが、日本語にとっても同じことですね。文法というのはそもそもきちっと守るというのではなく、話すときに絶えずそこから逸脱していくものであって「文法イコール守らねばならないもの」という考え方がおかしいのではないかと思います。文法というのはもう少しゆるやかだし、ゆるやかにとらえないとまた誤謬に陥るのではないかと思います。その寛容性こそが研究対象なのではないでしょうか。

(反対派 4—第一文学部・宮田)

今までの方と同じように、文法という言葉の使い方に問題があるのではないかという線で話をしたいと思います。まず文法的にまちがっているというのがどういうことかということですけれども、これは2つの種類に分けられるのではないかと思います。1つは意識的にまちがいだと、自分で直感的に判断できるものです。それから、自分で直感的には判断できない、例えば学校の先生や文法書に「それはおかしい」と言われなければ自覚できないような文法というのがあるということです。具体的な例をあげてみるとまず、直感的に判断できるものとしては、少し前にテレビのコーマシャルのキャッチコピーで「日本を休もう」というのがあったんですけども、この「日本を休もう」という言葉を聞いて多くの日本人はちょっとおかしいなというふうに感じると思うんです。これは「を」という助詞

の使い方と「休もう」という動詞がうまく合わない、使い方がおかしいということになるわけですが、このコマーシャルはわざと間違った文章をさらけだして、自分がいかに無知であるかというのをさらけだしたわけではなくて、ちょっと普通の言葉の使い方をふみはずすということによって、聞き手の注意をひくという効果を狙っているのだと思います。こういう CM が成立するというのは、この「日本を休もう」という言葉を聞いて、大多数の日本人が、これは普段自分が使っている言葉とはちょっと違うなと感ずることができるという確信が CM 制作者にあったからだと思います。このように自分で直感的に判断できる間違いがあるということと、もう1つは、よく話題になる「れる・られる」の使い分けなんですけれども、よく新聞の投書に「見れる」とか「食べれる」という言い方が間違いであるというものが見られます。実際に僕も塾の講師をやっていたとして、中学校の文法を教えるんですけども、「見れる」「食べれる」は間違いだというふうに教えているんです。問題集でもこれは×だという風になっています。ですが、中学校の生徒ですから、僕も「見れる」とか「食べれる」という言い方は日常的に使っていますから、なんでおかしいのかわからないんですね。なんでというふうに聞いてみても、そうになっているからそうなんだとしか言えない。これはなぜこういうふうになるかというのと、「見れる」とか「食べれる」という言い方が直感的に感じられる人もいますけれども、全員がそうではないという微妙なズレがあるんですね。その片方の価値観で「これが正しい文法ですよ」というふうに規定してしまうから、おかしくなるというわけで、そういうふうに直感的に間違いがわかるのと、それから、1つの規範として外から縛りつける、自分から意識的に習得しなければわからない文法があるということです。谷崎の文章に戻りますけれども、この「西洋語にあるような難しい文法はない」というのは、もしもきまりがなかったら、——例えば「日本を休もう」はきまりを踏み外しているわけですが、きまりがないということはコミュニケーションが成り立たないというわけですから、言葉というのは意識的に

はわからなくても、一つの規則の体系であるわけですから、まず最初のこの文章はおかしいということです。それから、もう少し前のところで「もしこの文章を文法的に間違いなく言おうとすると」というところがあるが、この「文法」というのは規範としての文法なんです。その車掌の言葉というのはきちんと意味が通じていますから、言葉としては正しいんですけども、規範としての文法とは矛盾するというわけですから、文法という言葉の使い分けがおかしいということです。以上です。

(反対派 5—第一文学部・椎野)

日本語の文法というものは習っても実際には役に立たないものかという点について反論を述べたいと思います。先程から、文法を中学校や小学校で学ぶということが、自分で実際に文を読んだり書いたり、文章を解釈するのに役に立つかという話が出ていますけれども、私は文法をなぜ学校の国語の時間に学ぶのかということについて考えてみました。それはやはり、言葉の決まりについて正しい知識をもち、それによって表現能力や理解能力を高めるためだと思います。確かに今の学校の授業でやる文法の授業ではなかなか興味をもてないと思いますが、表現のための文法ということで、私は文法の学習は絶対に必要だと思います。それは文章を表現するときに、正確さや適確さを文章に入れていくということは、言葉の決まりである文法を正しく守って、それを十分に活用して練り上げて行くことが必要になってくるからだだと思います。表現の正しい理解のためにも、表現者と同じか、それ以上の文法に対する知識が必要であると思います。やはり表現というものは文法にのっとってなされ、また理解は文法に従って達成されるものであると思いますので、文法の学習は国語の授業でする必要があると思います。例えば文の成分を取り上げるにしても、主語や述語といった成分を見分けるだけでなく、それらが表現上どのような役割をもつものであるか、主語や述語の順序が入れ替わると表現上どんな違いがでてくるのかということを考えることになり、これが表現の技術を高めることに通じると思いますので、その点からも、効果的な表現を学習するために

かなり文法の学習というものは意義があるのではないかと思います。以上です。

*

以上の弁論1は、資料の文章に対する賛成か反対かという立場から討論が行われたが、実際には、資料の論旨を的確に把握しているかという点がポイントである。そして、それは、資料の文章における論理的な矛盾点を見いだすことができるかというところにかかっている。この点について、すでにそのことに半ば気づいている意見も見られるが、まだ明確ではない。結局は、「文法とは何か」という観点から、文章中の「文法」の語の使われ方に注目していくことが求められることになる。このことをやや遠回しに指摘し、作戦タイムを経て、後半に入った。

(筆者): これから作戦タイムを設けますが、話を聞いていると、賛成派・反対派という分け方をしたんですが、賛成しているということと、谷崎の言おうとしていることを的確に把握しているかどうかということが別のようない意見がいくつか出ています。それは反対派の方にも言えます。今は賛成派・反対派ということで議論してるんですが、今いくつか意見があったように、「文法」という言葉の使い方に注目してみる必要がありそうです。そんなことを頭において、作戦タイムを開いてください。(作戦タイム:10分)

3-2 弁論2

(反対派 1—第一文学部・宮田)

さきほどの議論では、文法という言葉の使い方、意味について言いましたけれども、今度はまた別の視点で、谷崎の考えは日本語の言葉の論理と西洋語の言葉の論理というものを混同している、もう少し詳しくいうと、西洋語の論理で日本語の文法を分析をしているというところに根本的に間違いがあるのではないかとすることを申し上げたいと思います。例えば、真ん中の方に「日本語のセンテンスは必ずしも主格のあることを必要とし

ない」などと色々あり、もう少しあとになると、「つまり日本語には英文法におけるようなセンテンスの構成というようなものが存在しない」というふうに、英語とくらべて日本語にはこういうものがないと言っていますが、英語の論理で、英語の言葉のルールで日本語というものの分析するというのは間違いではないかと思います。言葉というのは、くわしく言えばきりがありませんが、文化によって発想からものの見方、世界のものの区切り方というものが全然違うわけですから、英語の価値観によって自分の言葉を判断するという卑屈な発想というか、狭い視野というものにはかなり問題があるのではないかと思います。それから、もう一つの視点として、先程文法には規範の文法と、自分の中にある、直感的に判断できる文法の2種類があるということを申し上げましたけれども、この問題も少し考えて見ます。この谷崎の文法観というものは、恐らくは学生時代に習った英文法の知識が背景にあると思うんですけども、この学校文法とか規範の文法、外国語を教えるための文法というのが、本当は言葉というのは、例えばコンピューターの言葉であるとか倫理学の言葉のように白黒はっきりしているものではなくて、かなりあいまいなものだと思うんです。言葉の定義でもそうですし、おばさんとおばあさんはどこでどう区別をつけるとか、先程のれる・られるの使い分けにしても人によってかなり黒白の区別というのがあいまいであると思います。ですが、そのあいまいさをそのまま教室に持ち込んで教えてしまうと、やはり授業として成り立たない、かなり大変じゃないかと思うので、実際の教育の文法というのは、実際は雑多であいまいであるような言葉を単純化して整理したものだと思うんです。ですから、学校で英文法によると、語彙の数というのはそんなに覚えていないわけですから、英語の場合、類義語によって細かい言い分けはできないわけです。それに対して日本語は自分の言葉で、言葉をたくさん知っているわけですから、微妙な表現も言い表せる。これに対して英語は語彙が限られている。だから、日本語はあいまいで英語は論理的だという原則にもつながるのではないかと思います。それに英語が本当に論理的

かという、今申し上げたように、学校で教える規範としての文法は実際の言葉を単純化したものにすぎませんから、実際には英語にはあいまいさがかかなりあるのではないかと思いますけれども、僕は英語はよく知らないからわからないんですけれども、実際の英語のネイティブが、学校で教えている英文法みたいに白黒はっきりした言葉を使っているのかということかなり疑問であると思います。どこまでが合っていてどこまでが間違っているかという境界線をつきとめると、英語もやはりあいまいさをもっていると思います。というふうに考えますと、谷崎がこの文章で言っていることは、西洋語にはちゃんとした文法というものがあるが日本語にはきちんとした規則がないというのは、それは学校教育向けに整理された英語の体系だけを見て、それを本当の英語の姿だと思って論理的だと。これに対して、自分の言葉をつかさどるルールというのは、普段はなかなか自分で意識しないわけですから、どうやって使い分けているのかということが無意識になっていまして、意識的にやっているのではないわけですから、日本語はずいぶんあいまいだなあ、英語みたいにすっきりした規則がないじゃないか、言葉の定義もずいぶんあいまいだというふうに思うという問題があると思います。ですから、西洋語の一面的な姿と、あいまいで雑多でかなりおおらかな日本語、自分の言葉を安易に比較しているという視点に間違いがあると思います。以上です。

(反対派 2—教育学研究科・坂口)

今の意見にちょっとつけ加える程度になるかと思いますけれども、谷崎は「文法」という一つの言葉の中で、私達が実際に使っている中の文法というものと、西洋の規範にあてはめた文法というものを同じものとしてここで書いていると思います。ですが、今言われたように、西洋語と日本語とを比較して、ここの文章の中にはテンスであるとかセンテンスのことを、すべて西洋文法と比較して日本語について語っているんですけれども、日本語を西洋語の中にあてはめようとしても、それは無理な話で、日本語は日本語として存在しているのであって、実際に使っている文法とい

うものと、西洋的な枠組みにあてはめようとした文法というのは、やはり必ず違ってきてしまうと思います。ですから、ここで谷崎が使っている「文法」という用語自体が二通りの意味をもっていると思います。以上です。



(賛成派 1—教育学部・吉岡)

「文法」という言葉の使い方なんですけれども、一行目のことでも「西洋語にあるような難しい文法がない」というのであって、特に日本語に文法がないというようなことは谷崎は言っていないと思います。それから、西洋語と比較してというようなことがよく言われていますが、これが書かれたのは昭和9年のことでして、その当時の文法というのは、今のような文法ができていたわけではなくて、西洋語の模倣によって文法が作られていた時代であったと思うんです。ですから、それは谷崎の時代がそうであったわけであって、それを今の我々がどうこういっても仕方のないことだと思います。以上です。

(賛成派 2—政経学部・本間)

英語と対照して比べているわけなんですけれども、もともと文法のような言語学というのは、比較することで欠点や特徴が明らかになるということがあって、西洋語を比較として持ち出していることには、特に異議はありません。そして、反論を聞きますと、谷崎は英語の方を礼賛していて、英語の文法の優れた点を見て、日本語のあいまいさについて非難しているという風にとれるんですが、実際谷崎潤一郎というのは、最終的には日本礼賛ということに落ち着くような人で、文法的に必ずしもあてはまるものよりは、それよりも少し逸脱した日本語の方に魅力を感じているというようなところがあると思います。そして、英語の文法ということですが、ここでは例えば英文法ということですが、フランスでも文法意識というのはかなり高いようで、外来語の侵入を防いだりというようなことが見られていて、日本人と西洋人の文法意識というものが違うのだと思います。それ

で、意識の違うものを比べているので、多少英文法礼賛という文章というふうにもとられかねないのですが、結局は、日本人にはそもそも文法という意識が育っていなかったのではないかというふうに思います。それで、文法という用語の使い方が一致しなかったりするのですが、そうは言いながら文法というものの存在は認めているわけです。結局、習わずとも覚えらるるもの、と日本人にとっては文法が意識されていたというふうに思います。以上です。

(賛成派 3—第二文学部・斉藤)

反対派の意見にあったように、西洋の文法から日本語をみるから、あいまいだというような意見が出るとおもうのですが、今われわれが習っている文法というのは、西洋の文法であって、西洋の視点からみた文法だと思います。そういう文法のことを谷崎は役に立たないと言っているのであって、やはり反対派の意見も谷崎の意見に賛成していることになるのではないかと思います。

(賛成派 4—商学部・渡辺)

反対派の意見の中で、英語の論理——比較的すっきりした形の英文法の論理から日本語をみてしまっている、日本人にとってあいまいな日本語と英文法とをゴっちゃにしているというような指摘がありました。が、先程賛成派の指摘もあったように、この時点では、今あるような中学校の文法のように、日本語の文法は確立していなかったわけで、日本語をみていく上で対照的に英語から見ていかざるを得なかったのではないかなと思います。なぜ、それでは外国語には古くから文法が確立されていて日本語にはなかったかと考えて見ると、日本人の場合には、例えばラテン語から派生してフランス語ドイツ語となったようには、違う語系の人と話す機会に恵まれていなかったのも、日本人がわかっていればいいやという感じで、日本語の文法の体系化がこれまで進んでこなかったのではないかと思います。日本人が習わずとも覚える文法というものと、学校で習う基本的な文法というものの2つがあるという気がするんですけども、日本語

の場合にはまだ習わずとも覚える文法と、学校でやるような文法——例えば、中学校で文法をやりますが、それまでにちゃんと日本語を話している人達がやるような単語の切り方、「わたしがこう言いました」の「言いました」を「言い」と「まし」「た」に分ける——というのは、それまで日本語を話してきていても、納得がいけないというか、理解に苦しむところだと思うんです。自分が今までの言語生活の中でなんとなくつかんできた文法と、学校で教えたり、外国人に日本語教育で教えようとしている規範的な文法の中身がだいぶ違うということが、日本語にとって問題であって、文法というものはないという賛成派の方でも、習わずとも自然に覚えてきた文法というものはあると思いますが、規範的な学校文法というものは日本人には直接必要のないものであると思います。

(賛成派 5—教育学部・長沼)

賛成派の方が大体いつてくれたので、わたしの方からはほとんどありませんが、1つだけ、反対派の意見の方が1行目の「日本語には西洋語にあるような難しい文法というものはありません」ということに反論が多かったんですけれども、ここで谷崎は、何も日本語に文法がないといっているのではなくて、ヨーロッパの言語にくらべて日本語は規則が簡単だということをいっていると思うので、ここはそれでいいのではないかと思います。それだけです。



(筆者): これで一応先攻後攻と終わりましたが、賛成派と反対派のどちらが勝つかというパターンで最初は始めましたが、どうも話を聞いていると、賛成派の言っている事柄と反対派の言っている事柄が逆であったり——つまり、賛成しているようで反対していたり、反対しているようで実は賛成していたりというふうな混乱が見えるような気がします。賛成反対にこだわらなくても結構ですから、もう少し谷崎の文章の論理的な問題、言っていることの是非という点から、最初に取り上げた文法とは何かという問題も含めて、もう一言言いたいという人がいれば自由に発言してくだ

さい。では、どうぞ。

(発言者 1): 日本人の視点から考えた日本人による文法があるのかということに興味があるのですが、あるでしょうか。まだそういうものがないんじゃないかというか、谷崎のいう西洋の模倣であるというのはやはり正しいのではないかと。

(発言者 2): この文章のまんなかあたりに、「1つの連続した動作を叙するにも『した』『する』『しよう』を同時に使ったり、前後して使ったり、まったく規則がないにも等しい」と、「規則がないにも等しい」と言っているわけです。で、今おっしゃったこととも似ていて、日本語には規則がないんじゃないかと思っているというのは、素朴な直感としては全くその通りであると思うのですが、ただ注意深く考えてみると、実は意識はできないけれども言葉に内在する規則はあるのではないかと思うんです。テキストを少し読んでみたのですが、「は」と「が」の使い分けであるとか、「いる」と「ある」の使い分けであるとか、どういう場合に使い分けのかというのがいろいろな例をあげて整理できるんですよ。厳密には、境界線のあいまいさというのは残ってしまいますが、ある程度の規則性というのは、理性的に考えることによって導き出せるのではないかと思います。ただそれが、今の学校教育の場で生かされていないというのが問題だと思います。

(発言者 3): そういう「は」と「が」の使い分けとかを、日本人にとっても外国人にとっても教えなければならないものなのではないでしょうか。基本的に言葉が話せるようになる段階までは必要だけれども、そこまで枝葉末節まで教える必要があるのだろうかという感じがします。賛成する立場でいうと、そういうふうに感じます。

(筆者): 要するに使えればいいのではないかと、ということですね。

(発言者 3): はい。

(発言者 4): 現代日本語自体が明治以降の翻訳調の影響を受けていると思うので、言葉自体が西洋の文法自体をとりこんだものになっていると思

うので、西洋の模倣になっているというところには納得するんです。ただ単純に模倣した部分があるので、読みづらいという弊害が出ているというのが現状だと思います。

(発言者 5): それでもある程度、日本語として特異な言葉の論理があるというか、昔あったようなしかめつらしい文章が減っているというのは、どこかに日本語の文法が内在しているということではないでしょうか。

(筆者): 言葉がかわっているということと、文法がどこにあるのかという問題でもありますね。

(発言者 6): 先程の「は」と「が」の問題に執着してしまっていますが、「は」を使うか「が」を使うかというのは、明らかに日本人の中では自然に区別して使っていて、明らかに状況というのは私達は自然に区別していると思うんです。ということは、文法的に区別して使っていると思うんです。そこまで使えればいいと言われればそれまでかもしれませんが、そういう「は」と「が」に見られるような違いは日本語の特性ではないかと思います。文法を知ることによって、その国の言葉の特性がわかり、ひいてはその国の文化がわかるのではないかと思うんです。ですから、そういう「は」と「が」のような細かいところにまでこだわって習得する必要が、外国人が日本語を習う場合にもあるのではないかと思います。

(発言者 7): 先程から、話せば規範的文法は必要ないという意見があったと思いますが、わたし自身まだすっきりしないところがあります。その部分に納得いきません。言語を文法から客観的にとらえることで、実際に運用する個人的なコミュニケーションのレベルでの、表現理解のお互いのズレを小さくしたり、より正確な判断ができるということにつながるのではないかと思います。また、解釈のときに、その場その場の状況で判断しているとは思いますが、その判断の場自体を広げることができると思うので、規範的文法というのは習うことが必要ではないかと思います。みなさんの意見もお伺いしたいと思います。

(筆者): 規範的な文法というのが何のために存在するのかということも

1つの大きな問題ではありますね。「は」と「が」を自然に区別しているという自然さがどこにあるのか、ということも問題ですね。

*

この後、判定と講評をジャッジの方々にお願いし、反対派の方に軍配が上がったが、その部分は省略する。

ここでの討論の目的は、「文法」に「文法事実」と「文法記述」の2種があり、その関係を考えつつ、「文法事実」の体系性に気づくことであった。それは、このことが後の述べる母語発見のための一つの糸口になると考えるからである。というのは、たとえば、日本語を相対化し、客観的に観察するというのが、母語のさまざまな運用の中で、構造や体系の存在に気づくことにつながり、それを説得的に記述することができてはじめて、母語を発見するというのが言えるのではないかと私が常々考えているからである。

これについては、ジャッジの一人である蒲谷宏氏からも次のような明快な指摘があった。

問題点は、1つには「潜在的にある文法」と「文法学としての文法」ということで、(略)その指摘はかなり早くから出てきて、その意味では鮮明になっていたと思います。ただし、そこにさらに運用上の問題がからんできて、規範的な文法どおりに話さなくてもいいじゃないかという点では賛成派の人でも正しいと思います。そういう視点で谷崎の文章をとらえるのは正しいと思うのですが、論点がそちらに流れるとどうしても説得力がなくなってくるように思います。そもそも谷崎は「文法」という語を混乱して使っているのが大きな問題としてありますので、そこをはずして運用の方にだけ話をもっていくと、ちょっと説得力が弱くなって、賛成派の人は細かい点に触れざるを得なかったというか、初めから割の悪い方を引き受けてしまったのではないかと印象はあります。

非常に大きい問題として、規範としての文法と潜在的に存在してい

る文法と、運用上の問題がどうかという問題は、現在の日本語学・言語学でも今なお解決していない問題だと思うんです。おそらく、そのあたりがこれからの講義の中で展開されて行くのであらうと、期待しています。

*

こうしたことを踏まえ、このディベートを次のように締めくくった。

(筆者)： 結局、今日議論したことをふまえて考えてみたいのは、私たちはこのあと何を知ろうとするのかということです。文法として規範としてのものと無意識の中の文法の二種類があるとするならば、どちらをわたしたちは考えなければならないのかということを取りあげたいと思います。それはすぐには結論が出ないと思うので、みなさんにテキストを読んでもらったり、後期になったら実際にデータを集めてもらって、自分たちである言語現象を探して、それを整理してもらうということもやってもらおうと思っています。ですから、何のためにそんなことをするのかということを考えてみたいです。日本語を考えると、日本語の文法を知ることとは一体何の役に立つのかということをもう少し考えてみたいと思っています。1年でそこまでいけるかどうか分かりませんが、まず文法とは何かという議論から始めてみたいというのが、今回のディベートの目的です。

4. 母語を発見する眼——この授業のめざすもの

このディベートそのものから、「文法とは何か」という問題の解決が完全に得られていないことは、その内容から明らかである。かつて同じテーマで、4コマ分(400分)にわたる自由討論を行ったときも、ほぼ同じ結果だった(細川『日本語を発見する』勁草書房1990参照)。しかし、これによって、「文法」にさまざまな問題が潜んでいるらしいことに受講者が気づき始め、そのことに関心を持つようになれば、それで、このディベートの所期の目的は達成されたことになると思います。

3で指摘した「文法」の両義性の認識に全員が到達するには、このあ

と、まだ数回の議論を必要としたが、受講者の講座への参加意識は、このディベートによって、きわめて高くなり、事実、前期終了時で、登録者11名中、途中放棄者はゼロであった。

*

しかし、これで、母語を発見するということが完了するわけではない。むしろ、問題は、これからにかかっているのである。

たとえば、こうした「文法事実」を明らかにするにはどうしたらようか、という方法へ議論は進むだろう。そこでは、まず、それぞれがテーマを持って、この問題に取り組むという姿勢が要求される。自らの母語をどのような角度から、どのような視点で考えていくかを定めるためには、まず、その前提として、自らのテーマを持たなければならないからである。

たとえば、93年度の場合、次のようなテーマが提出された(後期授業開始段階)。

- 日本語におけるむずかしいことば
- 接続表現について
- 日本語の人称
- 日本語の女性語
- 話しことばと書きことば
- 日本語の「テイル」について
- 日本語のオノマトペ
- 私はどんなことばを話しているか
- 日本語の名詞

自らの意思で参加した受講者の場合、このテーマ設定自体は、比較的容易である。受講者の多くは何らかの問題意識を有しており、その問題意識が刺激されれば、おぼろげながらも、自分のテーマは浮かび上がってくるからである。

しかし、その漠然たる自分のテーマを他者の前に示し、説得的に記述する過程で、多くの受講者は立ち往生してしまう。自分の発見したと思って

いた日本語分析がいかにか表層的な印象にとどまっていたかということに、ここで気づく。

そこで、講座では、次のような枠組みを示し、テーマに即して、固有の調査をするように勧めている。

発表及びレポートの骨組み

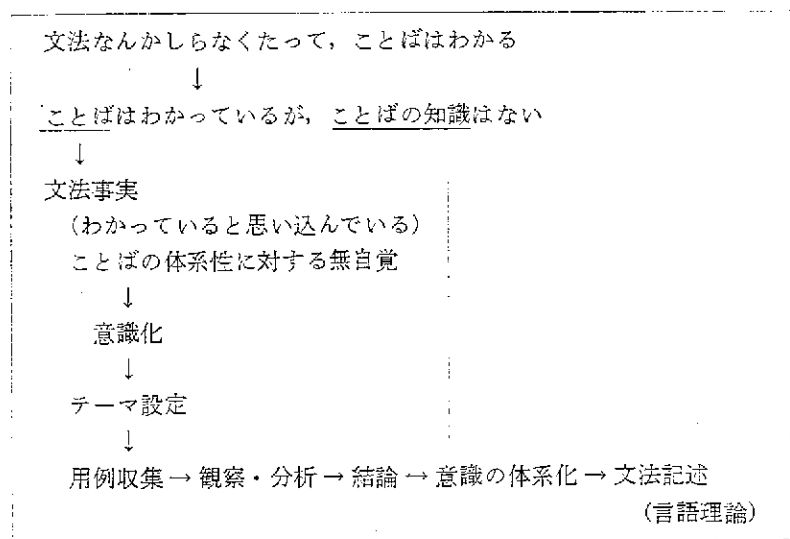
- ① テーマの設定
- ② 固有の調査
- ③ 調査結果の分析
- ④ 諸説の検討
- ⑤ 自らの結論

ところが、この段階でも他人の書いた参考書や解説書のたぐいを適宜切り貼りして解決を得ようとしてしまう癖が多くの受講者についている。ここでは、その実態についてくわしく論ずる余裕はないが、つまり、はじめに問題にした知識の切り売りを簡単に信じてしまうという陥穽が待っているのである。これは、学生と社会人の別を問わない。そして、この知識を得ることが日本語の発見であると思こんでしまう傾向が強いのである。従来のレポートの提出をみると、②「固有の調査」がすっぽりと抜けたものが圧倒的に多いのはこの事実を物語っているといえよう。

この状況を打開するには、まずことばに即して、日本語の諸現象を観察することから始めるしか方法はないと私は常々考えてきた。それは、ひとり筆者自身の問題ではなく、日本語の研究や教育に携わる者にとって不可欠のことであるという思いを最近強くしている。そのためには、こうしたいわば基本的な認識に基づきつつ、さまざまな用例を収集、観察しつつ、その分析を行うという態度が要求されよう。もちろん、このテーマ自体、前述のような収集・観察・分析の過程で、揺れ動き、変更を余儀なくされる場合も少なくない。いや、むしろ、その方が当たり前というべきだろう。この用例収集・観察・分析の過程で、さまざまな壁に突き当たり、これの一つひとつ乗り越えていくことが要求される。

ただ、こうしたことを講座に参加するすべての受講者に求めることは無理であろうし、そこまで要求することはできない。この行為自体が、かなり持続的な忍耐を要する観察の作業をとまなうため、安易な気持ちで受講してきた者にとっては、きわめて困難なように思われるからである。もちろん、そうした受講者を切り落とすのは容易だが、果たしてそれでよいのだろうかという疑念も湧く。したがって、レベルとニーズに応じ、その到達点を見定める必要がある。この講座の場合、とにかく自分の問題とした事柄の背後にある原理性や体系性を、ことばに即して説明できればよいというところに私は当面の到達点をおいている。

しかし、少なくとも、自分の問題意識を解決させるための視点と方法論を持とうと努めること、これが母語発見のための最低の条件であろう。このことをわかりやすく図示すれば、次のようになるであろうか。



以上のような、自らのテーマを発見するための土壌作りとして、「文法」という用語にこめられた、自分の中のさまざまな偏見を取り除くこと。今回のディベートの試みは、そうした意図に基づいている。同時にそれは、

母語を発見するための眼を育てる試みでもある。

5. おわりに

ここでは、93年度前期に行ったディベートの紹介と報告を通して、母語を発見することの意味について考えた。

ことばに関心を持つ早稲田の学生の層がかなり厚いことを頼もしく実感しつつも、同時に、それらの学生が息長く母語発見のプロセスを追っていきけるような講座が学内に必ずしも多くないこともわかってきた。日本語教師養成か日本語研究者養成かというような二者選択ではなく、もう少し長い眼でみた日本語発見講座というようなものがあってもいいように思う。

そのためには、こうした講座が広く一般の社会人にも公開され、学生と社会人がお互いに切磋琢磨し合うような、そういう場が必要であるようにも思われる。あるいは、学部生と大学院生が対等に議論できるような雰囲気も有効であろう。

しかし、それは単位認定のためのおさなりの授業や、テキストの知識の切り売りとは無縁の、相当厳しい自己改革の場でもあるだろう。そのような場で、母語発見の眼を持つさまざまな人材が育つことによって、はじめて日本語教育の世界にも層の厚い時代がくるのではなかろうか。

【付記】

今回のディベートに際し、参加の学生諸君の協力はもとよりのこと、日本語研究教育センターの蒲谷宏・坪井佐奈枝・等々力桜子の三氏には、お忙しい中ジャッジをお願いすることができた。また、録音・記録には、大学院文学研究科日本語日本文化専攻の小出美河子さんの手を煩わせた。記して謝意を表したい。

なお、このディベートの様子は、早稲田大学教職員交流誌「カレント」(1993年7月号)に掲載された。